

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 21 日現在

機関番号：24402

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21530591

研究課題名（和文）子ども家庭福祉実践におけるリスクとレジリエンスの視座の有効性に関する基礎的研究

研究課題名（英文）A Basic Study on Effectiveness of a Risk and Resilience Perspective in Social Work with Children and Families

研究代表者

山縣 文治（YAMAGATA FUMIHARU）

大阪市立大学・大学院生活科学研究科・教授

研究者番号：10159204

研究成果の概要（和文）：本研究の成果は以下の2つに要約できる。第一は、主に北米の対人援助領域におけるレジリエンスの視座に関する文献を精緻に検討することをおして、リスクとレジリエンスの視座が子ども家庭福祉実践における主要な援助の概念枠組みとなっていることを確認し、これがわが国の子ども家庭福祉実践の諸課題に対応しうるものであることを明らかにしたことである。2点目は、子ども家庭福祉実践において、レジリエンスがどのような形態をとるのかに着目することをおして、子どものレジリエンスを引き出す援助のあり方を提示したことである。

研究成果の概要（英文）：This study has two main purposes: firstly, it is to empirically clarify the effectiveness of a risk and resilience perspective in social work with children and families in Japan; secondly, it is to propose a structure of social work practice based on empirical study and researches. The findings are as the followings: in terms of the former purpose, reviewing literatures on resilience study, it is found that a risk and resilience perspective has been a main stream of social work and other helping professions in the north America and Europe; in terms of the latter purpose, paying attention to children who have been viewed as resilient under out-of-home care, it was concluded a structure of social work practice to enhance children's resilience.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	9,900,000	4,290,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：児童・家族・女性福祉

## 1. 研究開始当初の背景

子ども虐待の増加、子どもの貧困率の上昇、未成年高校中退者等の不安定な生活状況など、近年、子ども家庭福祉領域における課題は山積している。

「リスクとレジリエンスの視座」は、子ど

もと家族のマイナスの要素からプラスの要素へと援助者の焦点を切り替える可能性をもつ実践の概念枠組みとされ、本研究開始時点において、欧米のソーシャルワークおよび近接領域において、すでに広く議論され、実践に取り入れられていた。なかでも、レジリ

エンスという概念が生まれた発端は、発達心理学における、精神疾患や貧困といった生活上に困難のある親の子どもの発育過程にかかる研究とされる。その嚆矢として、Elder(1974=2009)による大恐慌の子どもたちについての調査や、WernerとSmith(2011)によるハワイ州カウアイ島での縦断調査が知られている。これらの調査の根底には、「困難な状況に置かれているにもかかわらず、良好に適応する子どもたちがいるのはなぜなのか」という学術的な問いがあった。やがて、こうした子どもたち背景には、子どもの内的な資源と子どもを取り巻く環境にある外的な資源との良好な相互作用があることが知られるようになった。

欧米のソーシャルワーク領域では、おもに発達心理学の影響を受けて、概ね1990年代からレジリエンスに関する議論が活発化した。北米のソーシャルワークにおける代表的な研究としては、Fraser(1997, 2004)らによる実証的な研究報告が挙げられる。今日では、レジリエンスはソーシャルワークの理論と実践の主流の考え方とする論者もいる(Bereda 2011)。

本研究を実施するにあたって、わが国における子ども家庭福祉領域にこの視座を導入することによって、より効果的な援助を展開する可能性について実証的に検討することに学術的かつ社会的意義があると考えた。さらに、レジリエンスという概念と、わが国の文化社会経済的な文脈との適合性についても考慮する必要性を踏まえつつ、本研究を進めることとした。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、以下の3点である。

(1) 「リスクとレジリエンスの視座」の概念定義の整理すること。

(2) 子ども家庭福祉実践における「リスクとレジリエンスの視座」の有効性について検討すること。

(3) 社会的養護のもとにある子ども、とりわけ児童養護施設に入所している子どものレジリエンスを明確化すること。

これらの3点を明らかにするために、以下に述べる方法によって研究を実施した。

## 3. 研究の方法

(1) 第1の研究の目的である、「リスクとレジリエンスの視座」の概念整理については、欧米の学術論文を精査した。さらに、わが国では発達心理学の領域がレジリエンスの概念をいち早く紹介してきたことから、この領

域における先行研究を中心にリスクとレジリエンスの視座について、理論的な整理をおこなった。

(2) 第2の研究の目的である、子ども家庭福祉実践における「リスクとレジリエンスの視座」の有効性を検討するにあたっては、まず、わが国の子ども家庭福祉領域における諸課題を国内の学術論文を精査することと、子ども家庭福祉領域の専門家へのヒアリングから整理した。

先行研究の精査からは、子ども虐待の急増、子どもの権利保障のあり方、子どもの貧困率の上昇、さらに若年層、とりわけ中卒者や高校中退者等の就労困難、不安定な生活やきわめて限定された将来的展望等が、喫緊の課題であることが確認された。

これらの諸課題について、子ども家庭福祉領域の専門家からは、社会的養護のもとにある子どもにおいてより高い確率で生じることが指摘された。

以上を踏まえたうえで、「リスクとレジリエンスの視座」の有効性について、子ども家庭福祉領域の専門家へのヒアリング調査を実施した。

(3) 第3の研究の目的である、児童養護施設入所児（以下、「入所児」）のレジリエンスの明確化については、「施設において良好に適応している入所児」についての聴き取り調査を児童養護施設職員（以下、「施設職員」）に協力依頼し、実施した。

具体的には、施設職員が担当する子どものうち、「うまくやっている子ども」だと主観的に思う子どもを数名挙げていただき、その子どもの入所時から調査時点までの経緯についてたずねた。

さらに、施設に入所しながら高校進学というストレスのかかるライフイベントを乗り越えた入所児を「レジリエントな子ども」と位置づけ、協力の得られた施設職員および入所児に聴き取り調査を実施した。

レジリエントな入所児を検討する際に、対照群を設定することが必要であると考えた。そこで、いわゆる一般家庭の子ども（以下、「一般児」）のうち高校進学を乗り越えた子どもに対しても同様に調査した。

以上の調査で得られたデータはすべて逐語録化し、質的に分析した。

なお、子どもへの聴き取り調査の実施にあたっては、代表研究者の所属する機関の倫理委員会の承認を得た。そのうえで、すべての調査において、調査者が調査協力者のプライバシーは厳重に守秘されること、調査への回答は黙秘または中断できること、そのことによる調査協力者への不利益は一切生じないことを口頭と書面で確認し、調査協力につい

て書面で承諾を得た。

#### 4. 研究成果

研究成果は、以下のとおりである。

(1) 先行研究を精査した結果、本研究における「リスクとレジリエンスの視座」の概念定義は、「リスクに注意を払いつつ、子どもと家族のもつ力を確信して働きかける、援助におけるものの見方」とした。これとは別に、本研究をすすめるにあたって、レジリエンスについても定義が必要であると考えた。そこで、同じく先行研究を精査し、レジリエンスの定義として、「困難にもかかわらず良好に適応すること」という Fraser(1997, 2004=2009)らの概念定義を用いることとした。その理由は、Fraserらの概念定義が、今日の北米を中心とするソーシャルワーク領域において広く引用されていること、また、この定義そのものが、他領域における定義も包摂する、レジリエンスの本質的な部分を含んでいるためである。

(2) 子ども家庭福祉実践における「リスクとレジリエンスの視座」の有効性については、理論的な観点から検討した。

結果としては、この視座が、これまでの子ども家庭福祉領域の援助において偏重されてきた、リスクというクライアントの負の側面だけでなく、リスクに直面するなかで良好に適応する力にも着目するという点において、理論上、有効であるとの結論に至った。

有効であると考えられる点について、より具体的に言うならば、リスクとレジリエンスの視座は、深刻化する子どもと家族の問題の予防と早期発見・早期介入のためのより有効なサービスの構築や児童虐待等による重篤な事例の立ち直りに向けて、子ども本人と家族の力を引き出す援助への具体的な実践方策を探求するために今後の子ども家庭福祉領域における重要なものの見方となることが示唆された。

(3) 児童養護施設入所児のレジリエンスの明確化についての研究成果は以下の3点から整理する。

① 児童養護施設職員への聴き取り調査は、社会的養護のもとにある子どものレジリエンスがどのような形態で表出化されるのか、というリサーチクエスチョンに基づいて、施設職員8名に実施した。

調査では、施設職員に挙げていただいた「うまくやっている子ども」について、「いわゆる『いい子』、「手のかからない子」、「誰とでもうまくやる子」等という発言が多くみられた。これらの発言からは、入所児の生来

的な持ち味を入所児のレジリエンスに帰する傾向がうかがえた。また、施設内では「問題なく」やっているものの、社会生活上のスキルの不足を指摘する発言もあった。こうした事例について職員は、「施設という狭い世界ではいまのままで良いかもしれないが、将来、退所してからの生活が心配」であることや、「退所後を見据えた自立訓練」が課題である、という思いをもっていることが明らかとなった。

さらに、この調査では、入所児の「良好な適応状態」が容易には判断しがたいことが多く指摘された。この指摘は、子どもの良好な適応状態は、多角的かつ総合的な観点からとらえることが重要であることを示唆しており、今後も引き続き検討していく必要がある。

② 先行研究では、レジリエンスは、①の職員の発言に多くみられたような個人内特性だけではなく、むしろ周囲との力動的な相互作用によってもたらされる側面が大きいと考えられている。そこで、「レジリエントとされる子どもが、なぜ、うまくやれているのか」という部分に一步踏み込んだ調査が必要であると考えた。また、「良好な適応状態」の定義が難しいという観点から、「施設に入所しながら高校進学を乗り越え、その後も通学している入所児」をレジリエントな子どもと操作定義したうえで、当該する入所児4名に聴き取り調査を実施した。

この研究成果は以下の2点から整理できる。

第1は、レジリエントな入所児は、レジリエントな状態に至る過程において、なんらかの浮き沈みを体験していることである。ここでいう「沈み」とは、子どもの心身にダメージを与えるような出来事のことであり、たとえば、学力不振のために進路変更を余儀なくされたことや、中学卒業を目処とした家庭への引き取りが実現しなかったこと等がそれにあたる。一方の「浮き」は、「沈み」の状態から抜き出て、ふたたび良好な適応状態へと移行していくことをさす。

第2は、「浮き沈み」は、子ども自身のもつ内的な資源と、周囲の環境にある外的な資源の相互作用から生起することである。とくに、「沈み」から「浮き」への移行において、担当の施設職員や、入所児について気にかけてくれる学校、地域等の大人からの働きかけが大きな役割を果たしていることが示唆された。

これは、困難な状態から通常以上の適応状態に至る過程は直線的な経過をたどるのではない (Fraser et al. 2004=2009) とする先行研究の結果と一致している。つまり、回復のプロセスは上昇傾向を基調としつつ、あ

る程度の波を内包しながら継続的に生起するのである。

図1は、このプロセスを概念図として示したものである。不適切なかかわり等によって困難な適応状態を示していた入所児が時間の経過とともに良好な適応状態に至るまでの経過を示している。

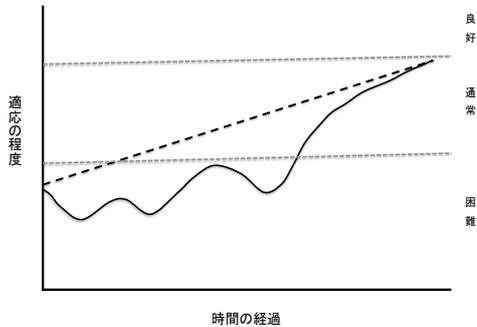


図1 リジリエントな状態に至る過程の概念図

注：Fraser(1997, 2004=2009), Sameroff & Gutman(2003), Ungar(2004) らの整理をもとに研究代表者ら作成。

③ 対照群としての一般家庭の子ども（以下、「一般児」）のリジリエンスについても聴き取り調査を実施した（対象児3名）。この調査の成果は、入所児と比較して、2点から整理できる。

第1は、一般児のほうが入所児よりも、高校進学にあたっての悩みごとやストレスが少なかったことが挙げられる。具体的には、「みんなが高校受験をするから、自分も勉強するのは当たり前」という発言に代表されるような、取り立てて大きなライフイベントとしてとらえているわけではないという、高校進学に対する態度が浮き彫りとなった。

第2は、家族や学校の教員、地域の大人といった、自分を気にかけてくれる大人についての言及がほとんどみられなかったことである。

上述の入所児と一般児との違いの背景には、一般児は、リジリエンスの要件とされるリスク状態にさらされている度合いが入所児よりもきわめて低いことがあることが分かった。

リジリエンスは、もともと、個人の発達を大きく阻害するようなきわめて強い逆境状態にがあることを前提に研究されてきた。近年、わが国においてリジリエンスを、日常生活上のストレスという文脈で論じる研究が散見される。一般児のストレス状況を理解し、

望ましくない結果に至ることへの予防策を立てることが重要であることは異論を待たない。しかしながら、リジリエンス研究は、本来、厳しい逆境状態におかれた際に個人がみせる適応について取り扱うものである。今回の調査からは、リジリエンス研究において、どのような状況を「逆境状態」とし、どのような状況を「良好に適応している」と定義するのが、きわめて難しくかつ重要な課題であることを明らかにしたと考える。

（4）最後に、以上の調査結果を踏まえて検討した、子ども家庭福祉領における子どものリジリエンスを引き出す援助のあり方について提言する。継続的かつ力動的な相互作用からもたらされる子どもの発達は、非直線的で可塑性に富む。子ども家庭福祉にかかわる者は、こうした子どもの発達の特性を十分に考慮し、子どものリジリエンスな状態は子ども一人ひとりによって異なること、リジリエントな状態を決定する主体は子ども本人であることを熟知しておくことが求められよう。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計4件）

1. 山縣文治「わが国の社会的養護は変わるのか」、『教育と医学』査読無、59(8)、756-761、2011年。
2. 山縣文治「里親制度等の現状と社会的支援」、『臨床心理学』、査読無、第11巻第5号、pp.671~676、2011年。
3. 岩間伸之「地域包括支援センターの動向と地域包括ケア—地域を基盤としたソーシャルワークの展開に向けて—」『社会福祉研究』、査読無、第111号、鉄道弘済会、pp.11~18、2011年。
4. 岩間伸之「権利擁護の担い手としての『市民後見人』の可能性—行政と市民との新しいコラボレーション—」、『月刊福祉』、査読無、92-2、全社協、pp.46-49、2009年。

〔学会発表〕（計1件）

- （1）第11回日本子ども家庭福祉学会「子ども家庭福祉実践における「リスクとリジリエンスの視座」の有効性に関する検討」門永朋子、岩間伸之、山縣文治、2010年6月7日、目白大学。

〔図書〕（計3件）

1. 山縣文治「社会的養護改革の20年とこれからの児童養護」『季刊児童養護40周年記念誌』、pp.16~23、2010年。
2. 網野武博・山縣文治編『児童家庭福祉論』

全国社会福祉協議会、2009年。  
3. 岩間伸之「ソーシャルワーク研究における結果の解釈とその方法」北川清一・佐藤豊道編『ソーシャルワークの研究手法』、相川書房、pp.187-199、2010年。

〔その他〕

ホームページ等

山縣文治（代表研究者）

[http://www.kansai-u.ac.jp/Fc\\_hw/faculty/index.html](http://www.kansai-u.ac.jp/Fc_hw/faculty/index.html)

岩間伸之（分担研究者）

<http://www.life.osaka-cu.ac.jp/cgi/pro.cgi?3211>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

山縣 文治 (YAMAGATA FUMIHARU)

大阪市立大学・大学院生活科学研究科

研究者番号：10159204

### (2) 研究分担者

岩間 伸之 (IWAMA NOBUYUKI)

大阪市立大学・大学院生活科学研究科

研究者番号：00285298

### (3) 連携研究者

なし

|